

AJU

コンビニハウス

会報

編集/コンビニの会事務局  
連絡先/〒452-0807 名古屋市西区歌里町 147 番地  
TEL/FAX(052)505-6082(コンビニハウス)

障害をもつ人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人  
コンビニの会

定価/150 円  
昭和 54 年 8 月 1 日第三種郵便物承認

第146号



レゴン・クラトンを夢見る少女 (インドネシア・バリ島)

「夢のかたち」 元氣を出して

自然写真家 河嶋 秀直

今、世界はコロナ渦の中で疲弊している。  
いつまで続くか分からない戦いに、夢を見ることを忘れてかけている。

人は、良い事(十)も悪い事(一)も口にする。だから、口偏に土と書いて「吐く」という字になるが、悪い事を口にしなくなれば、口偏に十と書き「叶う」という字になる。

「叶う」という言葉の響きには、安らぎのような温かさと希望の光を感じられる。

世界を旅して、子どもたちから色々な夢をたくさん聞いたが、それが彼ら・彼女らの生きる希望にもなっている気がした。

インドネシア・バリ島のウブドゥという小さな村で一人の少女に出逢った。

村の王宮で、小さい頃から踊りの稽古をしている彼女は、「レゴン・クラトンを踊りたい」とそっと教えてくれた。

彼女の瞳には、煌びやかな衣装を纏った自分の姿が見えているのだろう・・・  
(次頁へ)

ネパールで出逢った山岳民族の少女の瞳は、見たことのない大都会カトマンズの街を見つめていたようだった。

人それぞれ、みている夢のかたちは様々、だから自分の夢は自分だけのもの、人と無理に比べなくてもいい。

こんな世の中、夢を見ることもままならない人たちも多いと思うけど、それでも前を向いて歩いていこうよ。

夢は必ず叶うとは限らない、それでも夢を諦めないことが大切だと思っている。

元気を出して、良い事を口にすれば、きっと夢は叶う、そう信じている。

夢は寝てみるものじゃなく、起きてみるもの、そして叶えるもの。

僕は、いつでも、みんなの夢を応援しています。



ネパールで逢った山岳民族の少女

## 雑記 ごまめの歯ざしり

### 特別な春休みと夏休み

前回の原稿を書いたすぐあと、コロナの感染拡大が懸念され全国的に学校が休校になりました。そんな中、関西の高校で寮生活を送っている二人の甥っ子たちも、三月の初めに木曾に帰省し、滞在期間は三か月にも及びました。

二人が帰省した当初は気楽に休校を楽しんでいましたが、二か月目に入ると、高三のH君は焦り始めました。大学入試はどうなるのだろうか、まだ希望校が決まらないう。一方、弟のM君（高二）はマイペースを貫き、ラグビーボールと戯れながら室内で筋トレを続けていました。

将来の不安などを抱えるH君に「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」という本を薦めました。アイルランド人の父と日本人の母（著者）を持つ少年が、差別や偏見などの様々な困難を乗り越えていくというノンフィクションエッセイです。日本生まれでネパール育ちのH君にとって、共感するところが随分あったのか、とっても面白い本だったと喜んでくれました。

あれから数カ月がたち、遅い夏休みがやって来ました。甥っ子たちは残念ながら木曾には帰省していません。ネパールのコロナ感染の状況が深刻になったので、父親だけ現地に残り、母親と妹、弟が急遽日本に帰国しました。幸い、父親の仕事の関係先（関西方面）で家を借り、久しぶりに家族五人で特別な夏休みを過ごしています。

前出の本の中で、少年が母親から「エンパシー（単なる同情ではない共感）とは何？」と聞かれた時、「自分で誰かの靴を履いてみることだ」と見事に答えるシーンがあります。コロナ禍で不安や孤独感を感じる今だからこそ、エンパシーが大切だと痛感しています。

# NPO法人コンビニの会 年次総会報告

NPOコンビニの会

理事 渥美 匡史



2020年8月7日（金）に第19次NPO法人コンビニの会年次総会が開かれました。

今年はコロナ禍の影響もあり、委任状と共に書面表決（全体への委任ではなく、議案一つ一つに対しての賛否を記入）を正会員の皆様にお願いをし、少人数での総会となりました。今回の総会では例年行っている事業に対する報告に加え、新しく始まった地域サロン事業（エゼル福祉会からの受託事業）の報告がありました。少人数でしたが、事業の中心について質問や意見が出され、今後の活動をより充実させていきたいという熱意を感じることができました。NPO法人コンビニ

の会は正会員と会報購読会員の皆様からの寄付を基に活動をしています。総会で話された内容と共に、NPOの事業を改めて紹介します。

## ① 障害者福祉啓発事業

コンビニの会がNPOになる前から行っている機関誌の発行です。レスパイト事業から通所事業、ヘルパー派遣事業、社会福祉法人になるまで社会情勢と共に当時の職員がどのように利用者、仲間と向き合ってきたのか等、今読んでも新しい発見のある機関誌です。この機関誌を通じて多くの寄付や支援者が集まって今のエゼル福祉会が生まれましました。バックナンバーも揃っていますので、興味がある方はぜひご一読下さい。現在1600名弱の方へ発送しています。



## ② その他障害者の地域生活を支援する事業

### ○ 障害のある人の避難的生活および

#### 自主的な地域生活の支援

親亡き後の生活をつくっていくための話し合いの場の提供や地域で暮らすために生活の基盤が出来るまでの一定期間、家賃の半額助成を行います。

以前はパルハウスの調理室を使っていた当事者活動をし、ヘルパーとの付き合い方など話し合いながら自立生活を始めるまでの気持ちづくりをしました。

近年では、Mさんが本格的な自立生活を始めるまでの家賃補助を行っていました。

### ○ 障害者（児）の余暇活動を

#### 広げるための基金

障害者が外出をする際に課題となってくる介助者分の料金への補助です。すでに楽しみとして行っている活動ではなく、クラシックや演劇等、行ってみたけれど費用負担が・・・、というときに1回上限1万円、年

1万円までですが介助者分の費用補助をしています。

近年ではバリアフリーコンサートや東京への日帰り旅行や水族館での利用がありました。

### ③ 障害者支援を目的とする不動産の賃貸事業を含めた入居支援事業

障害のある方が地域社会で暮らしていくために当法人所有のワンルームマンション（パルハウス）を個人並びに障害者を支援する社会福祉法人に賃貸して管理運営を行っています。

建物の半分を社会福祉法人が建て、残りの半分をNPOが建設する作りは当時としては初めてのことでした。パルハウス全てワンルームとして扱いたかったのですが、名古屋から認めてもらえず、今のGH（当時はケアホーム）の部屋をCHとして認可すること、個別にヘルパー派遣の時間数を認めても

らうことで折り合いが付きました。

障害者が部屋を借りることの困難さは現在も続いています。ヘルパーに支えられた生活をつくることに加えて、住む場所の制限があるのが今の自立生活をつくることの難しさに繋がっています。今は一ヶ所ですが、今後の障害者支援の中で大切な事業になってくると思っています。

### ④ 地域住民交流サロンの運営

社会福祉法人エゼル福祉会から受託し、障害のある方に限定せず、地域住民が活用できる地域サロンを運営します。地域に暮らす方の孤立を防ぐ交流や、必要な社会資源と結びつける活動を目指すために月に2回、音楽家による生演奏を聴きながらのリラクゼーションカフェを開催しました。クラシックやジャズ、津軽三味線などさまざまな演奏とシフォンケーキ、飲み物を楽しむとても素敵な時間を地域の方とともに過ごしました。エゼ

ル福祉会の利用者だけでなく、地域の障害者の方にも来ていただきました。また、たくさんボランティアさんにも参加していただき、近隣住人さんからも「次はいつ？どんな演奏？」といった声をかけて頂けるようになってきていました。

地域サロンを担当している新理事の高嶋より地域サロンうたさとの報告をします。

### ○ 地域サロンのうたさとの報告

地域サロンうたさとは「地域貢献」と「WILL製菓授産部門の売上向上」を目的としてスタートしました。

#### ● 地域貢献の目標達成

当初は窓の外から何うように覗いていた近隣の方々でしたが、現在では半数以上近隣の方が占め、常連のお客様ができました。コロナ自粛でサロンを閉めていた時も、何度も『楽しみにしているから早く開催できるといいね』と嬉しいお電話を頂きました。

## ● W I L L 製菓授産部門の

### 売上向上の目標達成

サロンで提供しているシフォンケーキなどの売上が増加しました。製菓授産部門は、サロンからのお菓子に対する要求にも応え、売上向上に対する意識が高くなり、製菓授産部門の見直しが出来るようになってきた様子でした。

## ● 目標以外の成果

- ・障害のある仲間のお出かけの場所になりました。
- ・サロンのボランティアを通じてたくさんの方が関わってくれました。
- ・30人もの演奏者と関わることができ、再来演奏の方も徐々に増えてきました。

## ● 一年間やってみて思うこと

サロン開始当時は演奏者の確保・顧客確保と大変な毎日でした。ですが、少し慣れてくると、ジャズシンガーやバンド、クラシックとジャンル分けて交互にしたらいいか、

曲目もその日のお客様に合わせて変えた方がいいなど、いろいろアレンジを加えることもできるようになってきました。

嬉しいことにサロンボランティアも徐々に口コミや、ボラみみで集まるようになり、ボランティアの再来は100%になっています。サロンだけではなく、福祉現場に繋げるといいと思いました。

演奏者の中にもボランティアでやってくださる方も見つかり、予算内で何とか12月までのスケジュールが決まり、順調に稼働していた矢先のコロナ自粛閉鎖、本当に残念でした。再開の際のコロナ感染防止対策と、予定して下さっていた演奏者が、何人戻って来てくれるのか不安が残りますが、再開の折には感染防止対策をしっかり行い、閉鎖前の素敵なサロンに戻したいと思います。

(高嶋 みえ)



## 【 年次総会のまとめとして 】

地域に根差して発展していく社会福祉法人であるエゼル福祉会にNPOの活動が大きく影響を与えられると感じます。

公益活動の地域サロンを通じて、W I L Lのお菓子の提供やV O L Oでの音楽療法へつながっていく可能性を秘めています。喫茶へのボランティアを通して障害者支援に関心をもってもらう事でヘルパーや施設職員へと支援の輪がひろがります。福祉施設へ地域の方が来ていただくことは、様々な人材とのつながりになります。社会に出ていくことと同時に地域社会から興味をもってもらいます。まさに宝の山だと感じています。現在はコロナ禍により、エゼル福祉会に影響がないよう活動を自粛していますが、再始動するときにはより大きな力にしていきたいと思っています。

(渥美 匡史)

## 市江由紀子さんのこと

社会福祉法人やまびこ福祉会

理事 松原 伸二

市江由紀子さんとの出会いは、もう30年以上位前になるのでしょうか？

由紀子さんとは、職員と利用者という関係であった時期、一緒に障害者の生活について勉強し、コンビニハウスの事業を共に進めた時期、愛知の障害者運動の仲間として活動した時期等、それぞれの時期に関わり方を変えて、一緒に活動していた場面があります。

もう、かなり昔のこともあり、おぼろげな記憶もありますが、今回、原稿をお願いされ、過去の資料などをめくりながら、思い出

しています。

まず、最初の出会い、関わりは職員と利用者の間柄でした。

1985年当時、私は日本福祉大学の4年で、就職を控え、障害者施設でのボランティアや実習を行っていました。地域でのボランティア活動をしていた私は、漠然と地域づくりの活動やその当時、地域運動としても注目されていた「小規模作業所づくり」に関心があり、障害者の作業所を回っていました。その中で、中村区で作業所づくりをしようという親たちの活動があることを紹介され、活動場所へお邪魔するようになりました。その時に、由紀子さんのお母さんである大川理事長も活動メンバーの一人でした。

その後、1986年春、卒業と同時にス

タートした小規模作業所「やまびこ共同作業所」の最初の職員となりました。

由紀さんは1989年の春に名古屋養護学校を卒業して、やまびこの仲間になりました。

電動車いすで片道1時間近くかけて、通所してくれました。その当時、やまびこ共同作業所は3年目、16名の仲間が通い、知的障害の仲間とともに、特に車イスの仲間、重複障害の仲間が多く、誰かが通ろうとすると、車いすの仲間をどけないと通路も確保できないほどでした。そんな中でも、由紀さんは、同じ養護学校出身の先輩の仲間達と、作業や仲間の会（自治会）の活動等、学校とは違う自分たちで考え、つくる活動に参加していました。

特に2年先輩のMくんとは、PCのデータチェックの仕事でペアを組み、お互い口が達者で、よく話をしていました。また、せまくなった作業所を広い所へ引つ越さない等等、一緒に話していたと思います。

若く、未熟な職員の私にとつては、時々ぼろろときついことを言ってくれ、「どうするの?」と問いかけるような上目遣いがとても印象に残っています。

しかし1990年、秋、同僚のMくんは、不慮の事故で急死してしまいます。その後、由紀子さんは自立への強いねがいを表明して、AJUの自立生活体験などに取り組んでいき、1991年、多くのボランティアを集め自立生活を果たし、やまびこからも離れていきました。彼の突然の死は、自身の障害と

重ね合わせ、彼女の心むきに影響を与えたのかもしれないと今となって思うところです。その後、生活、活動の場は離れていきました。

次の出会いと関わりは1994年頃です。障害のある仲間の地域生活を考えていきたくいと学習の場の声かけがありました。きっかけはもう覚えていませんが、第2やまびこの場所を使って、元やまびこの身障のメンバー、ご家族等集まって定期的に勉強会、実態のアンケート、施設見学等をぼつぼつ進めていました。そこで、由紀子さんと再会します。

当時、短期入所や居宅支援といった地域生活を支える社会資源は乏しく、ヘルパーの勤務が17:00までだからそれに生活を合わせる、短期入所も障害が重いと受入先がなく、病院に入る等、安心できる状況ではありませんで

した。そんな声を集めながら、当時始まりつつあった「レスパイト」事業を東京まで見学に行ったり、そのバイタリティに圧倒されていました。そのころ、由紀子さんは自立生活をしていましたが、よく他の親から「由紀ちゃん話ができるからいいね」「由紀ちゃんだからできる」といったことを言われることがあったように思います。確かに由紀子さん自身の思いと努力なくして自立生活は継続できないのですが、そういった言われ方をすることに彼女は内心「ちがう」と言っていたように思います。

その後、この学習会から24時間、365日生活を支える「コンビニの会」が生まれていくのですが、彼女は、自分の努力、苦勞と自立生活の経験から、どんな障害があっても、

重度でも地域で好きなように生きていくこと、そのための支援や仕組みが必要と考えていたと思います。

1996年、レスパイト事業「コンビニハウス」は西区の一軒家を借りて始まります。

当初は公的な支援もない有料の自主事業でのスタートでしたが、多くの重度障害のある人達が会員となりました。それだけ重い障害を持つ人たちの行き場がなく、期待が大きかったのです。東海地方初の民間レスパイト事業として注目もされていました。やまびこの利用者も何人も会員になり、利用していましたので、私も行きがかり上、運営に協力していました。しかし、その運営は楽なものではありません。利用者の要望にどう応えるのか、支援者をどう集めるのか、資金はどうす

るのか、様々な問題を、みんなで車座になり、話し合った記憶があります。由紀子さんは、事務局としてデータを作り、利用者と支援者をマッチングする役目を担っていました。あ

る話合いで、問題が煮詰まりなかなか打開できない時、私は基本的にみんなの意見を出し合い、いわゆる民主的な手続きをとって進めるべきと考える方なのですが、由紀子さんは、「なんでそんなにいうことかかないかんの、やってられない」と感情的に訴えられたのです。由紀子さんの立ち位置は明確です。「利用者にとって最善かどうか」それが、他のいろいろな要因でうまく進まず、思わず出た思いだったと印象深く覚えています。

(言った言葉はうろおぼえなのですが、そのニュアンスは、はっきり覚えています)

その後、私は、立ち位置や役割を変えながら、現在のエゼル福祉会に関わり続けていますが、由紀子さんは、コンビニハウスから、自分の住んでいる地域で「障害者サポートセンター舞夢(まいむ)」を自身の支援者と共に立ち上げ、自分と障害のある人達の地域生活支援へ向っていきました。

最後にもう一つだけ思い出すのは、障害者自立支援法の反対運動での関わりです。2005年10月、障害者自立支援法は成立しました。障害のある人への支援を「応益」として一部利用負担を課した制度は、成立後、各地で心中事件が発生するなど、全国的に大きな反対、改善を求める運動、裁判闘争も関わりました。愛知県内でも、全国的な運動に連帯して、2006年、これでいいのか？障害



者（児）福祉と愛知集会実行委員会が結成され、障害者団体、事業者団体等、これまで手をつなぐことのあまりなかった組織を含め、大同団結し、1000名規模の集会、デモ行進等を展開しました。その実行委員長として由紀子さんが立たれたことでした。私はきょうされんの理事として、その活動に参画していました。どういう経緯で、そうなったかは今一つはつきりしません。もしかしたら、自分たちが要請したのかもしれない。しかし、彼女は「ぜいたくな生活がしたいのはありません、当たり前前の生活、生きるための援助を求めています！」と県庁前で、国会前で仲間とともに訴えてくれました。重い身体障害があり、しかし、自立生活を実践し、事業をつくりてきた彼女。また、理路整然と訴えるその様

子は、多くの仲間をまとめる、ある意味シンボリックな存在でもありました。愛知集会実行委も彼女が中心だったから、多くの団体が結集できたと思います。でもきつと、そんな立場に担ぎ上げられ、本当は「こまったなあ、もう」と思っていたのではないかとも考えます。でも一人の人間として当たり前前の生活を求め続けてきたからこそ、それを侵害するものへの抵抗の思いもあったと思います。

その後、自立支援法は障害者総合支援法と名前を変え、現在に至っていますが、全国的な反対運動とそこから発展した障害者自立支援法違憲訴訟の2010年1月にかわされた「基本人権文書」は現在も生きています。それにより成人期の障害のある仲間達の利用負担は上限額が0円つまり無料になって

いるのです。

長々と思い出したことを書いてしまいましたが、関わったそれぞれの人の中に、思いを残してくれた由紀子さん、今回、いろいろ過去の出来事を振り返り、自分もその時々思いをあらたにさせてもらいました。

ありがとう 由紀子さん。



やまびこ共同作業所の頃の由紀子さん  
(右から2人目)

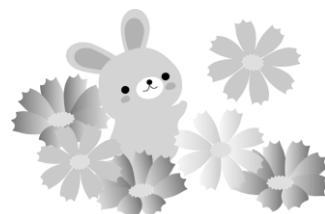
# 《活動状況》

## 7月

- 7日 NPO理事会
- 7日 同朋大学訪問（溝口・佐藤）
- 9日 きょうされん会議（佐藤）
- 10日 事業所連絡会リモート会議（大川・渥美）
- 10日 生活支援部主任会議
- 16日 通所部主任会議
- 17日 日本福祉大学渡辺先生来所（伊藤）
- 18日 重度訪問介護従業者養成研修
- 21日 事業所連絡会リモート会議（大川・渥美）
- 21日 通所部主任会議
- 22日 会報発送
- 23日 通所親の会
- 23日 通所祝日開所
- 25日 重度訪問介護従業者養成研修
- 27日 通所部全職員会議
- 28日 事務局会議

## 8月

- 1日 重度訪問介護従業者養成研修
- 4日 生活支援部ケースワーク会議
- 7日 会報会議
- 7日 NPO 総会
- 8日 赤い羽根共同募金配分決定車両納車
- 13-16日 WILL/VOLO 閉所（夏季休暇）
- 10日 通所祝日開所
- 19日 生活支援部主任会議
- 20日 通所部主任会議
- 25日 事務局会議
- 25日 生活支援部防災会議



## コンビニハウス クリスマス会中止のお知らせ

毎年開催しております恒例のクリスマス会ですが、  
新型コロナウイルスの感染が拡大している状況を鑑み  
誠に勝手ながら開催を中止させていただくこととなりました  
ご参加をご検討いただいていた皆様にはご迷惑をお掛けすることとなり  
大変申し訳ございません  
何卒ご理解のほど宜しくお願い申し上げます



問合せ先 052-505-6082  
コンビニハウス



## 事務局コーナー



# 「ご協力ありがとうございました」

7月～8月（敬称略・順不同）

### ★ ご寄付いただいた方々

（NPO法人コンビニの会）

鈴木明恵 榊原真哉 大竹 勝  
高橋裕子 堀江良子 榑野友美  
中島温子 松岡香代 酒井宣江  
森 亮太 東山愛子 佐藤真由美  
杉浦正敏 藤原功理 朝比奈幸生  
渋谷晴朗 中根勝見 江見千恵子  
竹内志之舞 滝藤建設(株) トクメイ  
岡本美知子・真理 名和真由美・芳恭

※会報購読料1万円以上お振込みの方

### ★ 活動にご協力いただいた方々

（生活支援部）

石原正寅 辻本道子 東原光江  
藤本菜見 大森 信 石原まち  
寺西 剛 鈴木千春 榊原さち  
伊藤翔磨 松本浩希 和田遥香  
村上梨央 曾我美保 酒井まみ子  
岩崎桃佳 田村淳仁 茂手木利典  
隅田 豊 吉岡将吾 磯村みづき  
田邊利徳 藤本由紀子

### ★ 物品寄付をいただいた方々

（生活支援部）

牛田 篤 渡辺智邦  
ヘルパーステーションウォーターリリー

（VOLO）

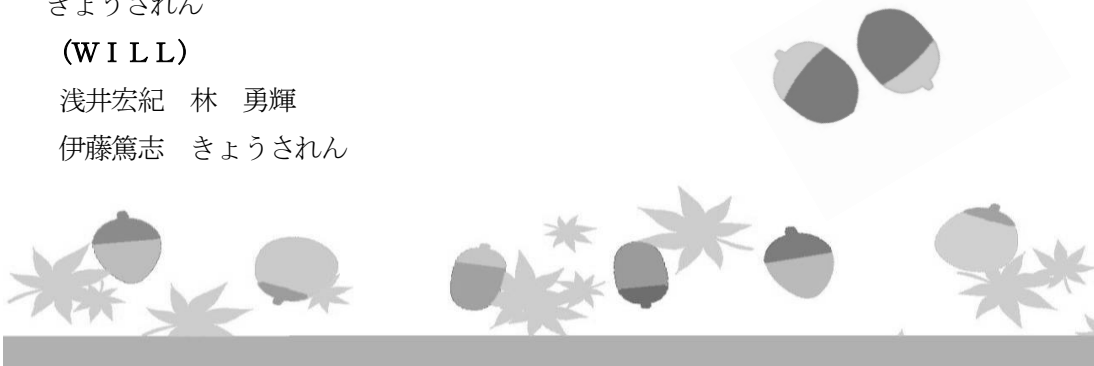
安永麻里 石原優樹 竹内まりや  
井口結唯 長野資子 市川翔子  
きょうされん

（WILL）

浅井宏紀 林 勇輝  
伊藤篤志 きょうされん

### ★ 会報発送ボランティア

佐藤美紀子 吉田嘉子  
丹羽正子



## 令和2年度赤い羽根共同募金助成事業完了のお知らせ

このたび社会福祉法人愛知県共同募金会、および日本労働組合総連合会愛知県連合会（連合愛知）から、令和2年度配分金の交付を受けて、下記の事業を完了いたしました。ここに事業完了のご報告を申し上げますと共に、募金にご協力いただいた皆様の善意に心より感謝申し上げます。



整備車両 日産／キャラバン（リフト付き送迎車・車いす4名）  
 事業費総額 4,303,252 円  
 助成金額 3,000,000 円  
 施設名 W I L L  
 納車日 令和2年8月8日



【銀行口座】三菱UFJ銀行 小田井支店 店番 238 （普） 口座番号 1440108

特定非営利活動法人 コンビニの会

【郵便振替口座】番号 00800-2-35190 コンビニの会

ご意見・ご質問・お問い合わせは下記までお寄せください。

障害のある人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人

〒452-0822 名古屋市西区中小田井 2-431

コンビニハウス Tel (052) 502-7731

Fax (052) 505-6082

コンビニの会

理事 宮川 優子

U R L <http://ezeru.sakura.ne.jp/>

E-mail [convini@beach.ocn.ne.jp](mailto:convini@beach.ocn.ne.jp)